

クメール寺院建築の尊像配置

—プレア・カン寺院のリンテルに表現された禅定印仏坐像—

日本学術振興会特別研究員 PD

久保真紀子

はじめに

本稿は、筆者が2012年に上智大学に提出した学位請求論文の一部であるとともに、その後に発表した2本の論文（久保 2014、2015）ならびに2015年11月に上智大学で開催された科研「検証 アンコール・ワットへの道」第10回研究会での報告内容を再編成したものである。

プレア・カンは、アンコール朝の最大版図を築いたジャヤヴァルマン7世統治期の寺院複合施設で、1191年頃の創建とされる（図1）。寺院は東を正面とし、東西約800m、南北約700mという大規模な敷地を持つ。同心矩形状に配された4重の周壁の各辺中央部には塔門が配され、一番内側を巡る第1周壁内の中央主祠堂の周囲には、経蔵や副祠堂等、いくつもの施設群が配されている。第2周壁と第3周壁の間の敷地の南側、西側、北側には、いくつかの施設を周壁で取り囲んで形成された副次的伽藍とも呼びうる小規模な複合施設が配されている。

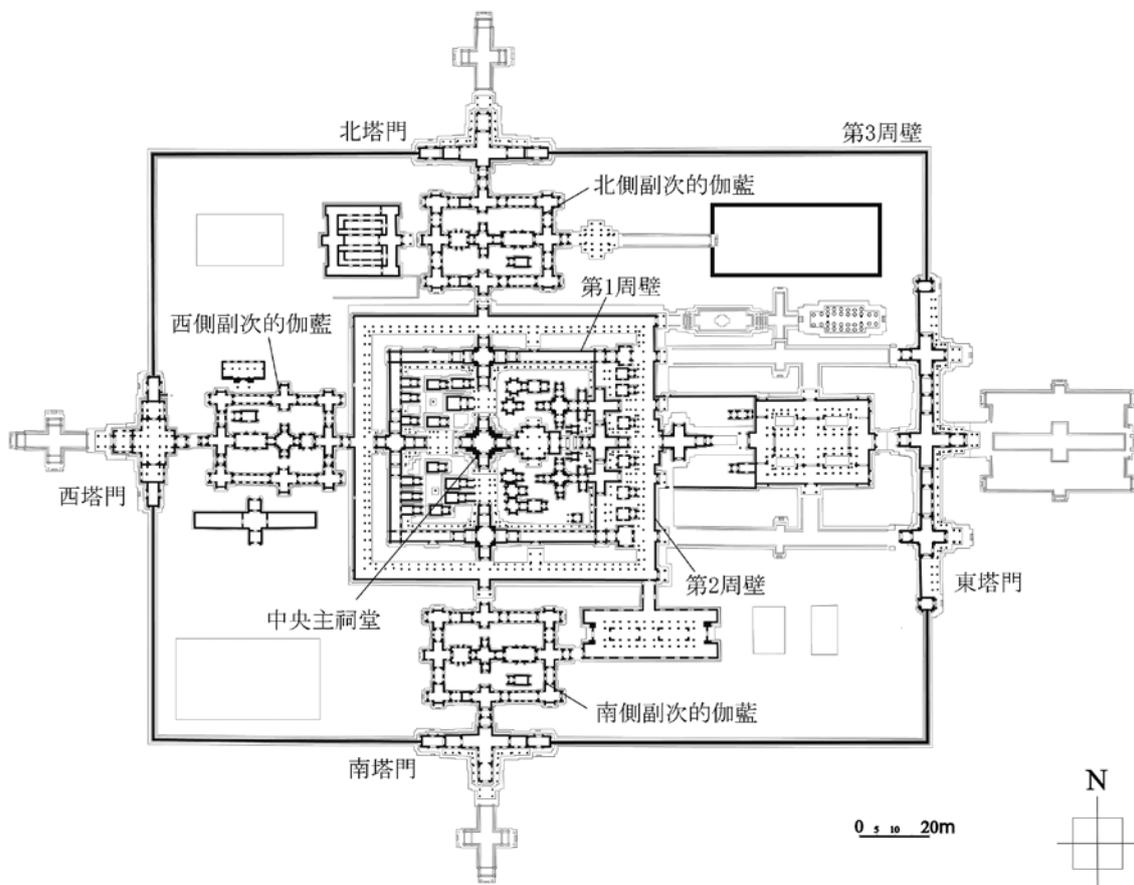


図1 プレア・カン伽藍全体、第3周壁以内（EFO作成図面をもとに筆者が作成および加筆した）

1939年、フランス極東学院による整備作業中に、プレア・カン敷地内から高185cm、幅58cm、奥行58cmの砂岩製の四角柱が発見された。4面にはそれぞれ72行のサンスクリット語碑文が刻まれ、この碑文についてはこれまでにセデスやマクスウェルら碑文研究者が仏語訳や英語訳を発表している¹⁾。また、この碑文には、西暦1191年頃この寺院の中央主祠堂に本尊が安置されたとする記述がみられることから、この寺院の創建年代を記したものとして、プレア・カン創建碑文とも呼ばれる（以下、創建碑文とする）²⁾。

この創建碑文でとくに注目すべき点は、寺院伽藍の特定の場所に特定の尊像を安置したとする尊像配置の記述や、安置した尊像の数に関する記述（史料1）であり、建造者ジャヤヴァルマン7世がこうした尊像配置によって何らかの世界観を表現しようとしたことが分かる。ただし、創建碑文中に登場する尊像名からは、安置された彫像の像容や詳細な配置構成を読み取ることは困難である。本稿では、プレア・カンで確認された諸資料をもとに、この寺院伽藍に実際に表現された尊像配置を類推し、そこに表現されたジャヤヴァルマン7世の宗教的・政治的世界観と、それが寺院建造過程において変容するプロセスについて考察する。

1. 本研究の資料と目的

寺院伽藍内に祀られた尊像を類推するための資料として、寺域で発見された丸彫の彫像、彫像を安置するための台座、出入口枠に刻まれた碑文（以下、出入口枠碑文とする）、そして、出入口構成部材に浮彫された装飾（以下、出入口装飾とする）が考えられる（図2、3、4、5）。筆者は、これまでの現地調査でプレア・カンにおけるこれらの資料を収集し、それぞれの資料について彫像の尊格を類推するにあたっての有用性と限界を検証した。そのうち、祀られた尊格を最も直接的に知りうる資料は、寺院内に祀られた丸彫の彫像である。しかし、伽藍内に安置された彫像のほとんどは遺失しており、遺跡内で確認できるものはごくわずかであるため、彫像から尊像配置を知ることは難しい。そこで、寺院伽藍を構成する各施設の出入口装飾を主要な資料として取り扱い、丸彫の彫像と台座、出入口枠碑文といった諸資料を補足的に用いることで、プレア・カンの尊像配置を推測することにした。出入口に浮彫された図像は、その出入口の室内に安置されたであろう彫像の尊格を表象している可能性があり、間接的であるにせよ網羅的に伽藍全体の尊像配置を類推できる有用な資料と考えられる。

ジャヤヴァルマン7世統治期のクメール寺院建築の出入口は、一般的に、ペディメント、リント、コロネット、ピラスター、出入口枠といった構成部材からなり（図6）、各部材にそれぞれ尊像や説話図といった図像、および花文様や葉文様といったさまざまな文様が浮彫されている。本研究の1つ目の目的は、これら出入口装飾に表された図像の主題を特定し、その配置構成について考察することによって、創建碑文における尊像配置の記述との整合性を検証することとする。

また、プレア・カンの大伽藍は、創建碑文が奉納されたとされる1191年以降も度重なる増改築を繰り返して形成されたことが、美術史や建築史あるいは岩石学の分野における先行研究で指摘

1) Cœdès 1941; Maxwell 2007b

2) マクスウェルはこの碑文のことを“Preah Khan: Foundation stele”や“Preah Khan foundation inscriptions”と表現している（Maxwell 2007b: 2, 13）。



図2 ガネーシャ坐像
(EFEO Archive No.17377)



図3 台座



図4 出入口枠碑文



図5 出入口装飾

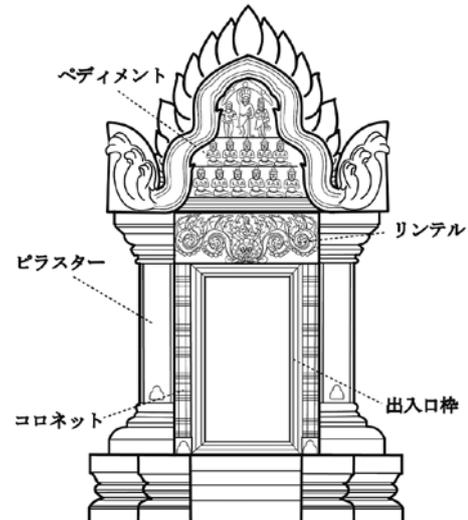


図6 出入口構成部材と名称 (筆者作成)

されている。本研究のもう1つの目的は、出入口構成部材に表されたさまざまな図像や装飾文様を出入口装飾というまとまりの諸要素として捉え、その様式的特徴を類型化し、プレア・カンの寺院伽藍の建造過程を再検証することである。これらの検証によって、本研究では、プレア・カンの寺院創建時と創建以降における尊像配置に込められた象徴的意味の変容およびその歴史的背景を考察する。

2. 出入口装飾の様式的特徴によるプレア・カンの寺院建造過程の再検証

出入口装飾の様式を分類するにあたって、プレア・カンの現地調査で確認された各施設にみられる増改築の痕跡を手掛かりに、出入口装飾の各部位の様式的特徴による類型を時系列に並べ、それら装飾の図像表現や様式の変遷過程を整理した。そのうちペディメントの様式は、この寺院の建造過程を通してほとんど変遷がみられなかった。一方、リンテルおよびピラスターには、装飾パターンの様式や、線型の形状や文様の組み合わせにいくつかの類型がみられ、その配置傾向も確認できた。つまり、出入口構成部材の細部意匠は、それぞれ別個にその様式を変化させながら、出入口全体として徐々にその様式が変遷していったと考えられる。

この出入口装飾の様式分類に基づき、プレア・カンの伽藍を構成する各施設の建造時期の前後

関係を整理し、伽藍全体として5つの時期区分を提示した³⁾。この建造時期区分は、美術史⁴⁾や建築史⁵⁾、あるいは岩石学⁶⁾等の先行研究で提示されたものと多少の差異はあるものの、大部分においてほぼ同様の結果を示している。各研究分野における時期区分の差異は、建造過程における採石時期と建造時期、彫刻が施される時期に時差が生じることによるものと考えられる。

3. 創建期の出入口装飾の図像表現とその配置傾向

次に、創建期の伽藍に込められたジャヤヴァルマン7世の世界観について考えるため、プレア・カンの出入口装飾に表された図像の配置傾向を整理する。プレア・カン創建期の伽藍全体を、「伽藍中央部」(第1周壁とその内側の諸施設)、「伽藍東側」(第2周壁東塔門と第3周壁東塔門)、「伽藍南側」(第3周壁南塔門と第3周壁内南側副次的伽藍)、「伽藍西側」(第3周壁西塔門と第3周壁内西側副次的伽藍)、「伽藍北側」(第3周壁北塔門と第3周壁内北側副次的伽藍)および「外周部」(第4周壁の4つの塔門)の6つの区分に分けると、各区域の出入口装飾に表現された主な図像の主題は以下のとおりである。

伽藍中央部(図7～9、図30、付図1)

観音菩薩立像5例、禪定印仏坐像13例、ジャータカ図8例(ヴェッサンタラ・ジャータカ1例、ムーガパッカ・ジャータカ2例、プーリダッタ・ジャータカ2例、シヴィ・ジャータカ1例、シーラーニサンサ・ジャータカ1例、サーマ・ジャータカ1例)。



図7 観音菩薩立像
(第1周壁東塔門リントル)



図8 ムーガパッカ・ジャータカ
(第1周壁南塔門)



図9 ヴェッサンタラ・ジャータカ
(第1周壁西塔門崩落リントル)

3) この出入口装飾の様式分類に基づく時期区分については、筆者の学位請求論文(久保 2012)で詳述しており、その後、2015年7月の日本建築学会東洋建築史小委員会で口頭発表した。本稿では紙幅の都合上その詳細を示すことを控えるが、後日稿を改めて紹介したい。

4) Stern 1965

5) Cunin 2004, 2013

6) クニン・内田 2002

伽藍東側（図10～12、付図2、3）

仏伝図1例（乳粥供養）、ジャータカ図3例（ブーリダッタ・ジャータカ1例、ヴェッサンタラ・ジャータカ2例）、禪定印仏坐像4例、観音菩薩立像1例、般若波羅蜜多菩薩立像1例。

伽藍南側（図13、14、付図4、7）

禪定印菩薩坐像2例、仏伝図1例（降魔成道）、ジャータカ図2例（シヴィ・ジャータカ1例、ムーガパッカ・ジャータカ1例）。

伽藍西側（図15～18、付図5、8）

ヴィシュヌ像6例（ヴィシュヌ立像2例、ガルダに乗るヴィシュヌ2例、アスラを追うヴィシュヌ2例）、ヴィシュヌを中心としたヒンドゥー教の三神像1例、シヴァ像2例（踊るシヴァ1例、放浪者としてのシヴァ1例）、クリシュナ伝説図13例（カーリヤを退治するクリシュナ2例、アリシュタと戦うクリシュナ1例、ケーシと戦うクリシュナ2例、カンサを殺害するクリシュ



図10 乳粥供養
（第2周壁東塔門）



図11 ブーリダッタ・ジャータカ
（第2周壁東塔門）



図12 般若波羅蜜多菩薩立像
（第3周壁東塔門）



図13 シヴィ・ジャータカ
（第3周壁南塔門）



図14 降魔成道
（第3周壁内南側副次の伽藍）

ナ 4 例、ゴーヴァルダナ山を持ち上げるクリシュナ 4 例)、『ラーマヤナ』図 5 例 (ラーマとハヌマーンの出会い 1 例、ラーマと猿王スグリーヴァの同盟 1 例、ヴァーリンとスグリーヴァの争い 1 例、アヨーディヤーへの凱旋 1 例)、行者坐像 5 例。

伽藍北側 (図19~23、付図 6、9)

シヴァを中心としたヒンドゥー教の三神像 3 例、シヴァ像 2 例 (踊るシヴァ 2 例)、ヴィシュヌ像 8 例 (ヴィシュヌ坐像 2 例、アナンタに横たわるヴィシュヌ 1 例、アスラを追うヴィシュヌ 2 例、ガルダに乗るヴィシュヌ 2 例、ヴィシュヌの超三界 1 例)、乳海攪拌図 1 例、クリシュナ伝説図 3 例 (ゴーヴァルダナ山を持ち上げるクリシュナ 2 例)、『ラーマヤナ』図 11 例 (シーターの誘拐 1 例、ラーマと猿王スグリーヴァの同盟 2 例、ヴァーリンとスグリーヴァの争い 2 例、ヴァーリンを殺すラーマ 1 例、シーターに会うハヌマーン 1 例、インドラジットの魔法で囚われたラーマとラクシュマナ 1 例、ランカー島の闘い 1 例、アヨーディヤーへの凱旋 1 例、シーター



図15 カンサを殺すクリシュナ
(第3周壁西塔門)



図16 カーリヤと戦うクリシュナ
(第3周壁内西側副次的伽藍)



図17 ガルダに乗るヴィシュヌ
(第3周壁内西側副次的伽藍)



図18 ゴーヴァルダナ山を持ち上げるクリシュナ
(第3周壁内西側副次的伽藍)

の神明裁判1例)、行者坐像12例。



図19 シヴァを中心としたヒन्दウー教の三神像
(第3周壁内北側副次的伽藍)



図20 踊るシヴァ
(第3周壁内北側副次的伽藍)

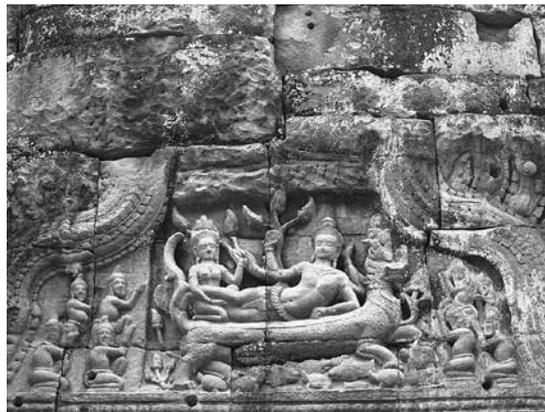


図21 アナンタに横たわるヴィシュヌ
(第3周壁内北側副次的伽藍)



図22 シーターに会うハヌマーン
(第3周壁内北側副次的伽藍)

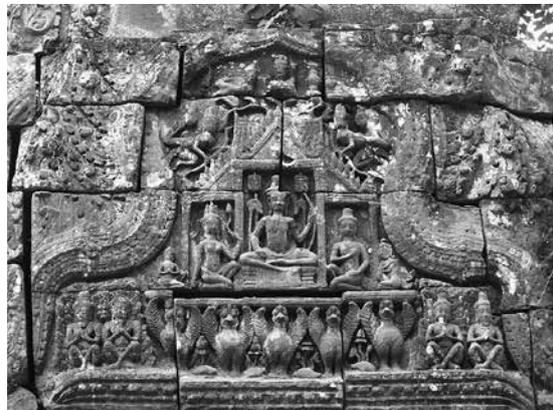


図23 アヨーディーヤへの凱旋
(第3周壁内北側副次的伽藍)

外周部（付図10～13）

観音菩薩立像 4 例、禪定印仏坐像 4 例。

これらの図像の配置傾向と、創建碑文の記述内容から読み取れる尊像配置、および出入口枠碑文に記された尊像名の配置傾向とを比較すると、一定の整合性が確認できる（図24～26）。具体的に、伽藍中央部の出入口装飾では、観音菩薩をはじめとした仏教図像が表されているとともに、出入口枠碑文にはサンスクリット語の複数の語彙のあとにローケーシュヴァラ（観音菩薩、世界

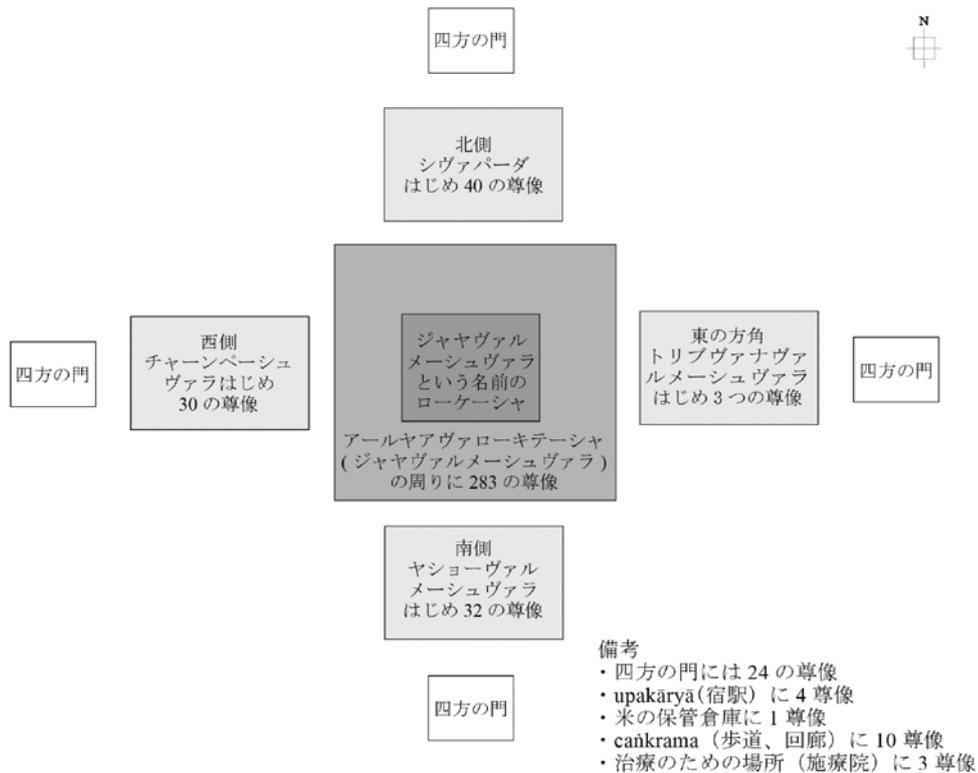


図24 創建碑文の記述内容に基づく尊像配置（筆者作成）

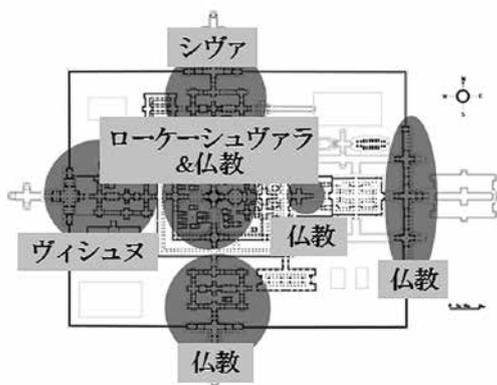


図25 出入口装飾に基づく尊像配置（筆者作成）

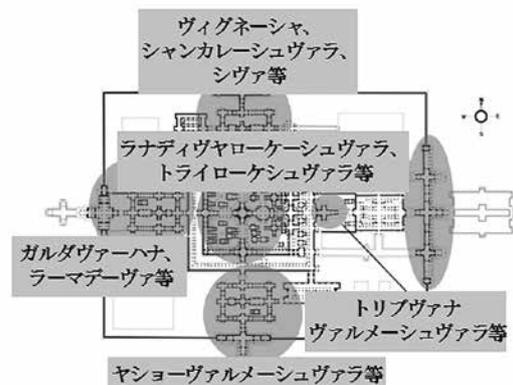


図26 出入口枠碑文に基づく尊像配置（筆者作成）

の支配者) という語尾が組み合わされた尊像名がみられる。伽藍東側と南側では、仏教図像が出入口装飾に表されるとともに、出入口枠碑文にはジャヤヴァルマン7世の先代の王や両親、祖先の名前に由来する尊像名がみられる。伽藍西側では、ヴィシュヌに関する図像が出入口装飾にみられたとともに、ヴィシュヌの乗り物ガルダや、ヴィシュヌの化身の1つであるラーマ等、ヴィシュヌに関連する尊名が出入口枠に刻まれている。そして、伽藍北側には、とくにその中心部においてシヴァに関する図像の浮彫が出入口装飾に多く確認できるとともに、出入口枠碑文にも、シヴァと関連する尊名が確認できる。このように、プレア・カンの伽藍内には、特定の区域に特定の信仰の対象となる尊像が安置された可能性を、出入口装飾の図像表現や碑文の記述内容から類推できる。

4. 創建期と増改築期における出入口装飾に込められた意味の変容

プレア・カンでみられるリントルの様式類型

次に、プレア・カンの建造過程に伴う出入口装飾の様式的特徴および図像表現に込められた意味の変容について考察する。とくに、創建時と創建以降の増築時における変容を検証するため、プレア・カンの第1周壁と周壁内施設群に多くみられる、中央に禪定印仏坐像を浮彫したリントルに着目したい。プレア・カンの第1周壁と周壁内施設群は、回廊状の周壁と、周壁各辺中央にある4つの塔門、周壁の四隅にある隅祠堂、中央主祠堂から四方へ伸びる列柱広間や列柱廊等の主要施設群と、田の字形に区分された4つの敷地内に林立する副祠堂群によって構成される。

ここで、プレア・カンのリントルに表された浮彫の類型を示しておきたい。リントルに表された浮彫について、プレア・カン伽藍全体では3つの類型が確認できる(類型i、ii、iii)。まず、類型iは、リントル中央下部にカーラあるいは植物文様を表し、その上部に葉状龕が配されている。そして、葉状龕からリントル両端に向けて左右に伸びる花綱は、上下に往復しながら伸びている。左右の花綱上には一対の小さな葉状龕を表し、その龕内に仏坐像や供養者像等を浮彫している(図27)。類型iiとiiiのリントルは、中央下部にカーラあるいは植物文様を表し、その上に葉状龕を表す点は類型iのリントルと共通するが、類型iiのリントルは、その左右に下端部で渦を巻く縦長の葉文様が並ぶ(図28)。長い葉文様の内側に、合掌する供養者像等が浮彫されているものもある。類型iiiのリントルには、中央下部のカーラと葉状龕の左右に、大きな渦巻文様と短い葉文様からなる装飾パターンが表されている(図29)。

こうした3つの類型を確認した上で、第1周壁と周壁内施設群でみられる禪定印仏坐像を浮彫したリントルに焦点を当てると、主要施設群で確認されたものには類型iの特徴がみられ、副祠堂群で確認されたものには類型iiiの特徴がみられることが分かった。なお、類型iiのリントルは主要施設群の数箇所を確認できたが、それらの中央にはジャータカ図などが表され、禪定印仏坐像が表されたものはみられなかった。

類型iのリントルに表された禪定印仏坐像は、全体として大きく表され、豊かな装身具を身に着けた姿で表現される(図30)。仏坐像の背後に表された葉状龕は、切れ込みの深い1枚の葉をかたどっており、龕の縁取りは表現されない。類型iiiのリントルに表された禪定印仏坐像は、装身具を身に付けずに簡素な姿で、小さく粗雑に表現されている(図31)。葉状龕は、三葉形アーチ状の縁取りに囲まれ、縁取りの周りに小さな葉模様が連続している。



図27 類型 i のリントル



図28 類型 ii のリントル



図29 類型 iii のリントル



図30 類型 i のリントル中央の
禅定印仏坐像

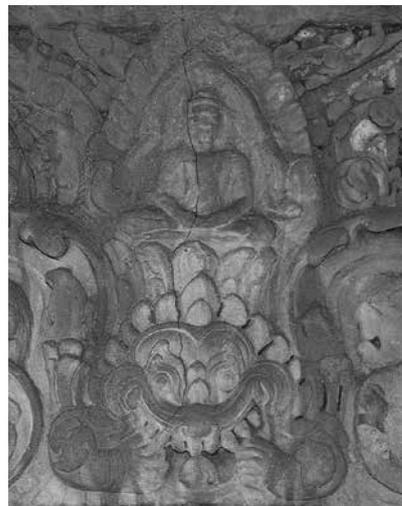


図31 類型 iii のリントル中央の
禅定印仏坐像

禪定印仏坐像を浮彫したリントルにみられる差異

プレア・カン創建碑文第35偈には、中央主祠堂に安置された本尊と、その周りに安置された283体の尊像に関する記述があることから（史料1）、第1周壁と周壁内の施設群は、創建碑文が刻まれた時点で、ある程度建造されていたことが推察される。そして、本稿第2章で述べたように、出入口装飾の様式的特徴と第1周壁と周壁内の施設群で確認できる増改築の痕跡からこれら施設群の建造過程を考えた結果、主要施設群と副祠堂群の建造時期に差異があり、5期の建造時期区分の中で、主要施設群は寺院創建期に当たる第1～3期の半ばまでに建造され、副祠堂群は創建以降の増改築期、とくに第3期後半～4期に建造されたことが分かった。つまり、主要施設群にみられる類型iのリントルは、創建碑文が刻まれた時点ですでに制作されており、類型iiiのリントルは、創建碑文が刻まれた後の増改築時に制作されたと考えられる。したがって、類型iと類型iiiの様式や表現の違いは、施設の建造時期およびリントルの制作時期の違いに起因すると考えてよいであろう。

5. 碑文史料からうかがえるプレア・カンの建造意図

禪定印仏坐像のリントルにおける様式的差異が建造時期の差異によって生じたものであるにしても、その背景には、建造時期の差異による建築様式全般の変遷や、時代が異なるごとに職人集団による造作に差異が生じた可能性もまた十分に考えられる。ここではこれらの可能性を十分に認めつつ、寺院建造者ジャヤヴァルマン7世の建造意図が創建期と創建以降の増改築期とで変容した可能性について、創建碑文や出入口枠碑文の記述を読み解きながら検証する。

プレア・カン創建碑文第34偈（史料1）に記されているローケーシャとは「世界の主」という原義を持つサンスクリット語であり、特定の尊格を表す言葉ではないが、碑文の記述内容からは、ジャヤヴァルマン7世の父親の姿をしたローケーシャ像がプレア・カンの伽藍中心、つまり中央主祠堂に安置されたことが読み取れる。また、これに続く第35偈から、このローケーシャは、アヴァローキテーシャ、すなわち観音菩薩⁷⁾でもあることが分かる⁸⁾。こうした記述内容から、中央主祠堂内に安置されたローケーシャ像には、ジャヤヴァルマン7世の父親ダラニンドラヴァルマン2世としての特性と、観音菩薩としての特性が与えられたことが読み取れる。

また、プレア・カンでは、64カ所の出入口枠に古クメール語の短い碑文が確認されており、それらはセデスやマクスウェルによってローマ字表記化および解釈がなされている⁹⁾。主要施設群で確認された14カ所の出入口枠碑文のうち9カ所で、*ṅak sañjak*（ネアック・サンジャク）の冠称を与えられた個人名と、古クメール語で「世界の主」を意味する *kamraten jagat*（カムラターン・ジャガット）という冠称を伴う尊像名が、「形」「姿」「像」を意味するサンスクリット語、*rūpa*（ルーパ）によって繋がれた形式で記載されている。第1周壁東塔門で確認された碑文（史料2）のように、カムラターン・ジャガットの冠称を伴う尊像名には、語尾のローケーシュヴァ

7) 観音菩薩を指す一般的なサンスクリット語は *Avalokiteśvara*（アヴァローキテーシュヴァラ）だが、プレア・カンで発見された創建碑文や出入口枠碑文では、*Avalokiteśa*（アヴァローキテーシャ）や *Lokeśvara*（ローケーシュヴァラ）といった語で言い換えられている。

8) Cœdès 1941: 275; Maxwell 2007b: 34

9) Cœdès 1951; Maxwell 2007a

ラの語と、他のサンスクリット語の語彙を組み合わせたものが多い。ローケーシュヴァラが「観音菩薩」の他、「世界の支配者」の意味を持つことを考えると、これらの尊像名は、観音菩薩を表すと同時に支配者ジャヤヴァルマン7世を表した可能性があり、観音菩薩と王に対する賛辞が暗示されたと解釈できる。そして、その後にはネアック・サンジャクという冠称を伴った人物名が続く。サンジャクは高官を意味することから¹⁰⁾、碑文が刻まれた出入口のある室内に、当時王に仕えていた高官たちの姿を表した尊像が祀られたのかもしれない。そして、王朝直属の高官たちは、カムラテン・ジャガットの冠称を戴く儀式によって尊格化され、その尊像が本尊ローケーシャの周囲に安置されたと思われる。さらに、創建碑文にあるように、本尊ローケーシャにはジャヤヴァルメーシュヴァラ (Jayavarman (n) īśvara → Jayavarmēśvara) という名前が与えられたことから (史料1、第34偈)、先の2つの特性に加えて、ジャヤヴァルマン7世自身としての特性も与えられたと考えられる。高官の特性が与えられた尊像は、ジャヤヴァルマン7世の父親であり観音菩薩であると同時にジャヤヴァルマン7世自身でもある本尊を莊嚴する役割を担い、本尊を取り巻くように安置されたことが推察される。

次に、副祠堂群の出入口枠碑文の多くは、南東敷地内副祠堂5の碑文 (史料3) のように、カムラテン・ジャガットを冠する尊像名が、kamrateñ añ (カムラテン・アン) を冠する名前的一部分と、deva (デーヴァ、「神」の意)、īśvara (イーシュヴァラ、「支配者」「王」の意)、īśvarī (イーシュヴァリー、「王妃」の意) 等の語尾を組み合わせて成り立っている。これらカムラテン・ジャガットの冠称を伴って祀られた人物は、単独で、あるいは両親をはじめとする近親者とともに尊格化され、尊像として礼拝されるようになったと考えられる。セデスによると、10世紀以降の碑文で、カムラテン・アンは尊像のモデルとなった地方領主等、実在の人物の冠称として用いられた¹¹⁾。また、各地方において功績を残した領主がその地方の守護神として尊格化される際に、カムラテン・アンの冠称が与えられたとする解釈もある¹²⁾。カムラテン・アンという冠称の明確な意味についてはさておき、これらの出入口枠碑文の記述は、特定の地方領主 (地方神) がジャヤヴァルマン7世によってアンコールのプレア・カンに集められ、そこで何らかの儀式が執り行われることによって、寺院内に奉納されるに相応しいより上位の尊格となるべく、地方領主 (地方神) にカムラテン・ジャガットの冠称が与えられ、副祠堂内にその尊像が安置されたことを示すのではないだろうか。

尊像を安置することが認められた地方領主とは、戦争で活躍したり儀軌祭礼の資財や人員を提供したりと、当時の王朝に対して何らかの功績を残した人々であったことだろう。地方領主にとって、プレア・カンに尊像を奉納することは、王に対する忠誠を表明することであったとともに、アンコール朝から評価を受けた証として一定のステータス・シンボルでもあったと思われる。一方、王は尊像を寺院内に奉納させることで地方領主をこの寺院に帰属させ、毎年恒例の祭事等の際に定期的に参詣させる足掛かりにしたと考えられる。

これら副祠堂群の出入口に残るリントルには、概して類型 iii の禪定印仏坐像か、それが削り

10) Jenner 2009: 612

11) Cœdès 1951: 98

12) Jacques 1985

取られた痕跡あるいは植物文様のような形に改変されたものがみられた。しかしながら、それら副祠堂群の室内に必ずしも仏教尊像だけが安置されていたとは限らず、ヒンドゥー教の尊像や精霊信仰の尊像等、各地方領主の信仰を表す礼拝対象物が安置された可能性もある。したがって、これら副祠堂群の出入口リントルに施された禪定印仏坐像が、一様に堂内に安置された尊像を表象する役割を担っていたと言い切ることはできない。

このように、中央主祠堂に祀られた本尊ローケーシャ像を取り巻くように地方領主（地方神）を祀る副祠堂が次々と建立されるに伴い、中央主祠堂と副祠堂群の間に中心と周縁の関係が築かれた。中央に祀られたローケーシャ像、すなわち観音菩薩像に対して、類型 iii の禪定印仏坐像はその周縁を飾る従属的な図像としての意味、いわばジャヤヴァルマン7世の信仰する仏教へ帰属する地方領主の象徴として表現された可能性が考えられる。この副祠堂および尊像の奉納は、地方領主が、形式的ではあれ仏教に属することを示すと同時に、地方領主やその祖先を尊格化し、ジャヤヴァルマン7世の支配するアンコール朝と王の信仰する仏教へと統合されることを意味したと考える。

まとめにかえて —ブレア・カンの尊像配置の変遷とジャヤヴァルマン7世の政治戦略—

以上を、ブレア・カン伽藍全体の尊像配置の中で捉えなおしてみたい。中央主祠堂に祀られた本尊ローケーシャには、観音菩薩としての特性、ジャヤヴァルマン7世としての特性、そしてジャヤヴァルマン7世の父親としての特性という3つの特性が込められていた。このような多義的な特性を備えた本尊を中心に、その周囲に安置された多様な信仰に属する彫像群にもまた、王の祖先や、アンコール朝歴代の王、王朝直属の高官、あるいは地方領主やその家族等、個人や祖先の特性が仮託されていたことが、それぞれの出入口枠に刻まれた碑文の解釈によって明らかとなった。つまり、ブレア・カンの伽藍内に奉納された多様な信仰に基づく尊像群は、個人崇拜や祖先崇拜という共通の慣行を基底として結びついているといえよう。創建碑文の第158～160偈によると、ジャワとヤヴァナ（安南）、チャムの王たちが聖水を持ってアンコールで行われた祭礼に定期的に参加していた¹³⁾。この記述から、当時アンコール朝の影響力はマレー半島や、ヴェトナム北部、インドシナ南東の東岸と南岸にまで至っていた様子がうかがえる。このように広大な地域には、おそらく仏教だけでなくヒンドゥー教や精霊信仰等を信仰する人々もいたであろう。

これらを踏まえると、創建時のブレア・カンには、ジャヤヴァルマン7世の影響力が及んだ地域の人々を統治し、アンコール朝の宗教的、政治的中心性を確立するための装置としての役割が与えられていたと考えることができよう。そこでは、彫像に個人や祖先の特性を与えて崇拜する慣行を巧みに利用することによって、1つの寺院内に多様な信仰が混淆する尊像配置が計画されたと思われる。このように創建時には、第1周壁と周壁内施設群で構成された伽藍中央部の空間は、ジャヤヴァルマン7世自身であると同時に、王の父でもある本尊とその周囲に高官が付き従うアンコール朝の中枢部のための空間として計画されたと考えられる。そして、宗教的な枠組みの上では観音菩薩を本尊とする仏教的世界観が表現された。その中央部の空間に地方領主が入り込む余地はなかったであろう。

13) Cœdès 1941: 281-282; Maxwell 2007b: 95-98

しかし創建以降には、伽藍中央部の空間に、地方領主を尊格化した尊像を安置するための副祠堂が中央主祠堂を取り囲むように増築された。そこには、地方領主たちをアンコール朝ならびに王朝が信仰する仏教へと帰属させ、地方勢力を統合しようとするジャヤヴァルマン7世の政治的指向が、創建時の王のそれよりもさらに強まっていったプロセスとして理解できる。

ジャヤヴァルマン7世はその治世に、王都アンコールから遠く離れた地域に寺院建設を通じて地方拠点を築き、王都と地方を結ぶ王道や石橋を整備し、121カ所に宿駅を、102カ所に施療院を設置した¹⁴⁾。その支配領域は、東は南シナ海まで、西は現在のタイ領のミャンマー国境付近まで、南はマレー半島北岸まで、北はタイ中部のスコタイやラオスのビエンチャンまで拡大された。その領土拡大の動きを象徴するかのよう、プレア・カン中央主祠堂周囲には、各地の地方領主（地方神）を祀るための副祠堂が次々と建設された。いわば、この寺院伽藍には、ジャヤヴァルマン7世の統治下で各地の諸勢力が統合されてゆく様相が表現されたと考えられることができよう。なお、プレア・カンよりも少し後に着工されたと考えられる王都の中心寺院バイヨン¹⁵⁾では、中央主祠堂の周りを取り囲む小室群の13カ所に地方領主（地方神）の名前が刻まれている¹⁶⁾。創建以降に副祠堂群を増築して地方領主（地方神）を祀ったプレア・カンとは異なり、バイヨンではその配置計画の段階から、地方領主（地方神）が本尊の周りを取り囲む配置構成が計画された可能性が高い。このバイヨンをはじめとして、ジャヤヴァルマン7世統治期の諸寺院に祀られた地方領主（地方神）については、今後、プレア・カンにおける研究成果を1つの指標として、出入口装飾の図像表現や碑文の記述内容を詳細に比較検討してゆく。それによって、王都アンコールと地方拠点との関係や、諸寺院の間に築かれた関係について考察を深めてゆきたい。

【謝辞】

本研究は、科研費（22・5387）、高梨学術奨励基金（2009年）、みずほ国際交流奨学財団の留学助成を受け実施されたものである。また、現地調査は、カンボジア政府アプサラ機構の許可のもと実施し、調査時には、同機構ならびに上智大学アジア人材養成研究センターからご助言やご協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。

注：本稿の挿図ならびに付図のうち、注記のないものはすべて筆者自身が撮影・作成したものである。

【主要参考文献】

- Cœdès, George. 1941. "La stèle du Preah Khan d'Angkor." *Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient* 41(2): 55-302.
- . 1951. "L'épigraphie des monuments de Jayavarman VII." *Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient* 44(1): 97-120.
- Cunin, Olivier. 2004. "De Ta Prohm au Bayon, Analyse comparative de l'histoire architecturale des principaux monuments du style du Bayon." Doctorat de l'Institut National Polytechnique de Lorraine.

14) 石澤・三輪 2014: 79-81

15) クニン・内田 2002: 218

16) Maxwell 2007a: 95

- . 2013. “A Study of wooden structures: Contribution to the architectural history of the Bayon Style Monuments.” In *Materializing Southeast Asia’s Past: proceedings of the EurASEAA 12* Volume 2, edited by Marijke J. Klokke and Veronique Degroot. 82-107, Singapore: NUS Press (The conference of the EurASEAA 12 was held in 2008 and this paper was originally presented in a conference at the School of Geosciences, Department of Archaeology, University of Sydney in 2006).
- Ecole Française d’Extrême-Orient. “Preah Khan.” *Rapports de la Conservation d’Angkor*.
- Hawixbrock, Christine. 1989. *L’iconographie du Prah Khan d’Angkor*. Paris, Mémoire dactylographié de DEA. Université de Paris III (Unpublished).
- Jacques, Claude. 1985. “The Kamraten Jagat in Ancient Cambodia.” In *Indus Valley to Mekong Delta: Explorations in Epigraphy*, edited by Noboru Karashima, 269-286. Madras: New Era Publications.
- Jenner, Phillip N. 2009. *A Dictionary of Angkorian Khmer*. Canberra: Pacific Linguistics.
- Maxwell, Thomas S. 2007a. “The Short Inscriptions of the Bayon and Contemporary Temples.” In *Bayon: New Perspectives*, edited by Joice Clark, 122-135. Bangkok: River Books.
- . 2007b. “The Stele Inscription of Preah Khan, Angkor Text with Translation and Commentary.” *Udaya* 8. Phnom Penh: 1-113.
- Roveda, Vittorio. 2005. *Images of the Gods: Khmer Mythology in Cambodia, Laos & Thailand*, Bangkok: Riverbooks.
- Stern, Philippe. 1965. *Les monuments Khmers du style du Bayon et Jayavarman VII*. Paris: Presse de Université de France.
- 石澤良昭・三輪悟. 2014. 『カンボジア密林の五代遺跡』 連合出版.
- クニン、オリヴィエ・内田悦生. 2002. 「バイヨン様式建造物の建築史構築における砂岩帯磁率の寄与」『アンコール遺跡調査報告書2002』 日本国政府アンコール遺跡救済チーム [JSA]. 197-223.
- 久保真紀子. 2012. 「アンコールのプレア・カーンにおける図像表現とその配置構成：出入口に施された装飾を中心に」2012年度上智大学学位請求論文.
- . 2014. 「アンコールのプレア・カーン寺院における尊像配置とその意味：出入口の浮彫図像と碑文の比較を通して」『佛教藝術』 337: 56-83.
- . 2015. 「禪定印仏坐像の表現と配置構成—アンコールのプレア・カンの出入口に施された浮彫装飾を中心に」『東南アジア—歴史と文化』 44: 27-44.

【史料1】 プレア・カン創建碑文 (K.908)¹⁷⁾

[第34偈] saśrījayavarmmanrpaśrī-jayavarmmeśvarākhyalokeśaml
vedenducandrārūpairludamīlayad atra pitṛmūrttiml

It was here (in Jayaśrī / Preah Khan) that King Jayavarman, in the year Form-Moon-Moon-Vedas (1113 or 1114 Śaka) opened the eyes of [the Bodhisattva] Lokeśa under the name of Lord Jayavarmeśvara [being] the image of [his] father.

「ここ（ジャヤシュリー）に、かのジャヤヴァルマン王は、彼の父親の姿をしたジャヤヴァルメーシュヴァラという名前のローケーシャを、形（1）、月（1）、月（1）、ヴェーダ（3もしくは4）[の年（釈迦暦1113/14年＝西暦1191/92年）]に開眼させた。」

[第35偈] āryāvalokiteśasyalmadhyamasya samantataḥ śatadvayan trayośtīstena devāḥ pratiṣṭhitāḥll

Around [this] central Ārya-Avalokiteśa he (Jayavarman) established two hundred and eighty-three gods.

「中心のアールヤ・アヴァローキテーシャ（本尊ローケーシャを指す）の周りに、彼（ジャヤヴァルマン）は283の諸尊を安置した。」

17) ローマ字への翻字は (Cœdès 1941: 274-275)、英語訳は (Maxwell 2007b: 32-34) による。日本語訳は、これら先行研究をもとに筆者が行った。

[第36偈] vivudhās śrītribhuvanavarmmeśvarapurassarāḥl trayāḥ pratiṣṭhitās tenalpūrvasyān diśi bhūbhṛtāll
In the eastern direction he, the king, established three gods, beginning with Lord Tribhuvanavarmmeśvara.
「かの王は、東の方角にトリブヴァナヴァルメーシュヴァラをはじめとした3尊を安置した。」

[第37偈] kāṣṭhāyān dakṣiṇasyāṃ śrīl yaśovarmmeśvarādayaḥl tena pratiṣṭhā devālviṃśatir dvādaśa uttarāll
In the southern area, he established thirty-two gods, starting with Lord Yaśovarmmeśvara.
「南側に、王はヤショーヴァルメーシュヴァラをはじめとした32の諸尊を安置した。」

[第38偈] śrīcāmpēśvaravimvādyastrimśat paścimatas surāḥl kauveryāṃ śivapādādyāścatvāriṃśatpratiṣṭhitāḥll
In the west, he established thirty gods, starting with the image of Lord Cāmpēśvara; in the north, forty, starting with a Śivapāda.
「西には、彼（ジャヤヴァルマン）はチャーンペーシュヴァラの像をはじめとした30の諸尊を安置し、北にはシヴァパダをはじめとした40の諸尊を安置した。」

[第39偈] eko vṛihigr̥he devaścaṅkrameṣu punar daśal catvāraś copakāryāyāmlārogyāyatane trayāḥll
One god at the rice-storehouse, then ten in the ambulatories, four in the staging post, and three in the hospital.
「vṛihigr̥ha（米の保管倉庫）には1尊、caṅkrama（歩道または回廊）には10尊、upakāryā（宿駅）には4尊、ārogyāyatana（治療のための場所）には3尊安置した。」

[第40偈] dāreṣu ca caturdikṣulcaturviṃśati devatāḥl ete śatāni catvārildevās trimśac ca piṇḍitāḥll
Twenty-four deities in the gateways [located] in the four directions. These put together [with the 283 gods mentioned in verse 35, make a total of] four hundred and thirty gods.
「四方の門には24の尊像を安置し、これらはひとまとまりにされた430の諸尊である。」

【史料2】第1周壁東塔門中央東側前室出入口枠に刻まれた碑文（K.621）¹⁸⁾

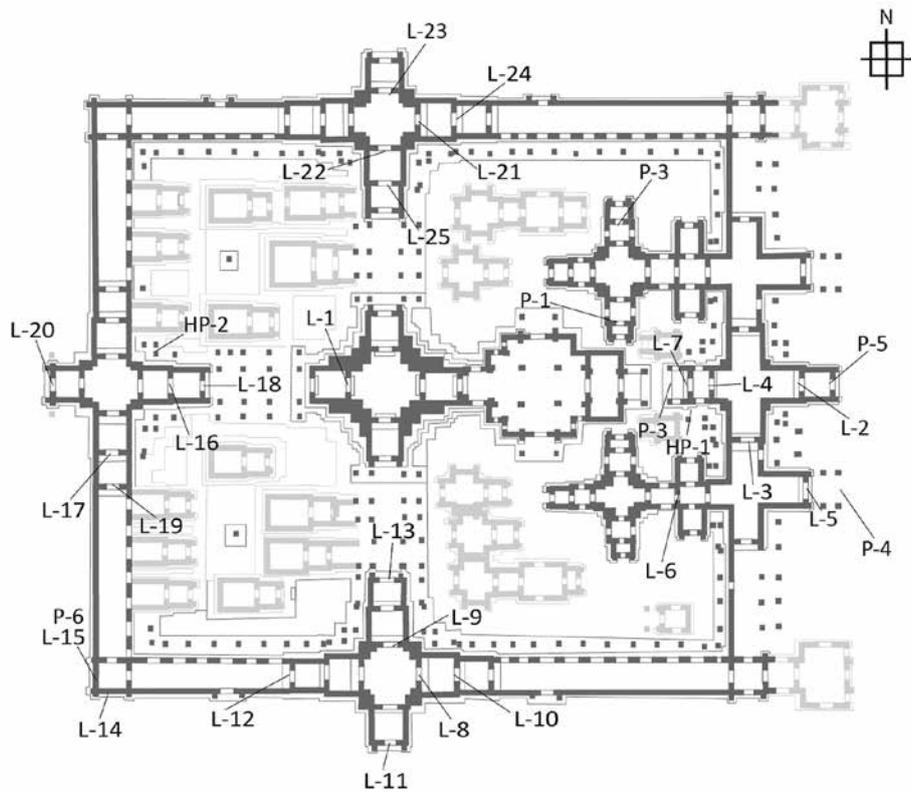
kamrateṇ jagat śrīraṇadivyalokeśvaralrūpa ṅnak saṅjak harisoma chveṅll
「ネアック・サンジャク・ハリソーマ・チュヴェーンの姿をしたカムラteen・ジャガット・ラナデイヴィヤローケーシュヴァラ」

【史料3】南東敷地内副祠堂5の出入口枠碑文（K.907）¹⁹⁾

kamrateṇ jagat śrīsaṃmadadevalrūpa kamrateṇ aṅ śrīsaṃmadakumārall
「カムラteen・アン・サンマダクマーラの姿をしたカムラteen・ジャガット・サンマダデーヴァ」

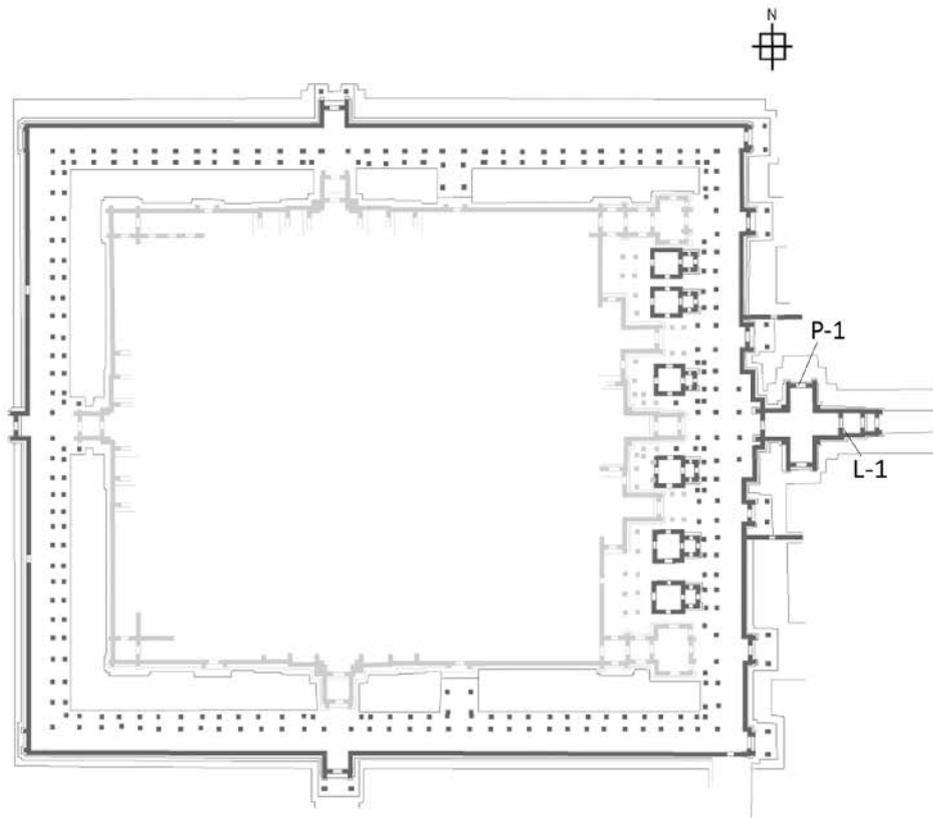
18) ローマ字への翻字は（Cœdès 1951: 109; Maxwell 2007a: 125）を参照した。日本語訳は筆者による。

19) ローマ字への翻字は（Cœdès 1951: 107; Maxwell 2007a: 132）を参照した。日本語訳は筆者による。



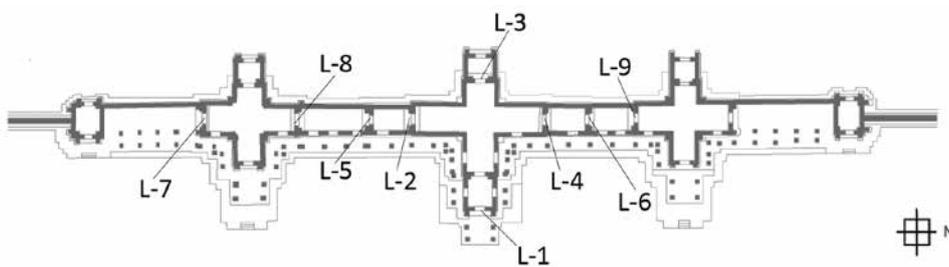
ペディメント		リンテル	
P-1	シーラーニサンサ・ジャータカ	L-1	観音菩薩立像
P-2	禪定印仏坐像	L-2	観音菩薩立像
P-3	戦闘場面	L-3	禪定印仏坐像
P-4	禪定印仏坐像	L-4	観音菩薩立像
P-5	神殿の中に立つ男女	L-5	ヴェッサンタラ・ジャータカ
P-6	戦闘場面	L-6	禪定印仏坐像
ハーフペディメント		L-7	プーリダッタ・ジャータカ
HP-1	サーマ・ジャータカ	L-8	禪定印仏坐像
HP-2	シヴィ・ジャータカ	L-9	観音菩薩立像?
		L-10	禪定印仏坐像
		L-11	仏教三尊像?
		L-12	禪定印仏坐像
		L-13	ムーガパッカ・ジャータカ
		L-14	男女&ケーシンと戦うクリシュナ
		L-15	「仏伝」剃髪
		L-16	禪定印仏坐像
		L-17	禪定印仏坐像
		L-18	観音菩薩立像
		L-19	禪定印仏坐像 (崩落)
		L-20	ヴェッサンタラ・ジャータカ (崩落)
		L-21	禪定印仏坐像
		L-22	プーリダッタ・ジャータカ
		L-23	ムーガパッカ・ジャータカ
		L-24	禪定印仏坐像
		L-25	禪定印仏坐像

付図1 伽藍中央部で主題が確認された出入口装飾とその配置



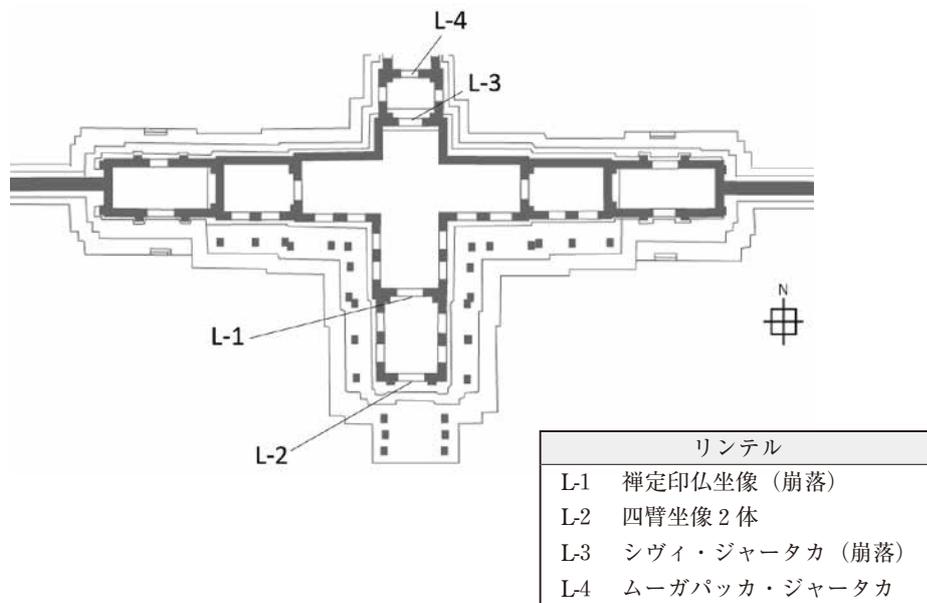
ペディメント		リントル	
P-1	プーリダッタ・ジャータカ	L-1	「仏伝」乳粥供養

付図2 第2周壁で主題が確認された出入口装飾とその配置

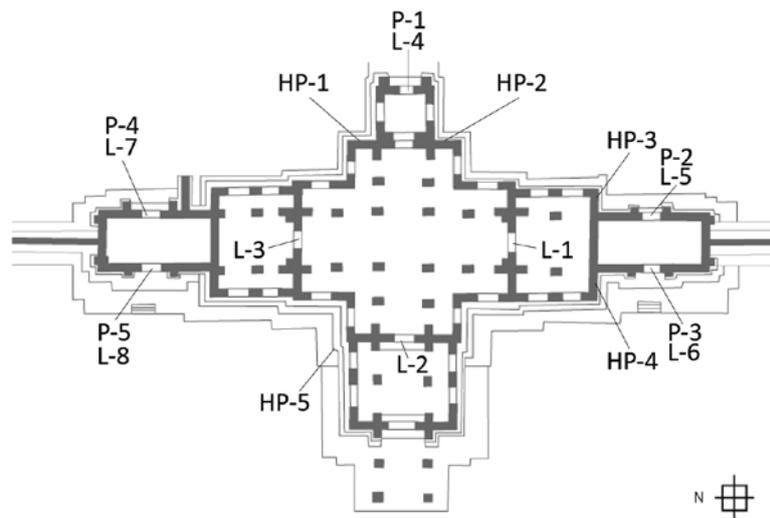


リントル			
L-1	ヴェッサンタラ・ジャータカ (崩落)	L-6	プーリダッタ・ジャータカ
L-2	禪定印仏坐像 (崩落)	L-7	ヴェッサンタラ・ジャータカ
L-3	禪定印仏坐像 (崩落)	L-8	多菩薩立像
L-4	禪定印仏坐像	L-9	観音菩薩立像
L-5	禪定印仏坐像 (崩落)		

付図3 第3周壁東塔門で主題が確認された出入口装飾とその配置



付図4 第3周壁南塔門で主題が確認された出入口装飾とその配置

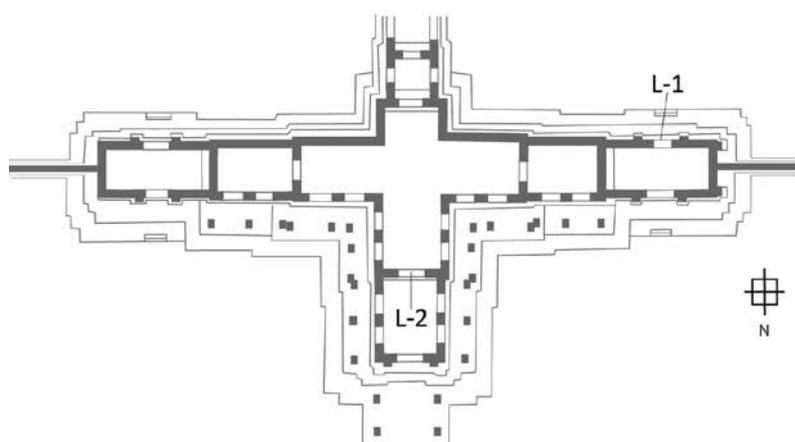


ペディメント	
P-1	水面上に浮かぶボートの場面
P-2	四臂坐像
P-3	カンサを殺すクリシュナ
P-4	『ラーマーヤナ』 ラーマと猿王スグリーヴァ の同盟
P-5	踊るシヴァ

リントル	
L-1	行者坐像
L-2	カンサを殺すクリシュナ
L-3	ガルダに乗るヴィシュヌ
L-4	ヴィシュヌ立像
L-5	ゴーヴァルダナ山を 持ち上げるクリシュナ
L-6	『ラーマーヤナ』 ラーマとハヌマーンの出会
L-7	ケーシンと戦うクリシュナ
L-8	アリシュタと戦うクリシュナ

ハーフペディメント	
HP-1	ゴーヴァルダナ山を 持ち上げるクリシュナ
HP-2	『ラーマーヤナ』 ヴァーリンとスグリーヴァ の争い
HP-3	カーリヤと戦うクリシュナ
HP-4	カンサを殺すクリシュナ
HP-5	『ラーマーヤナ』?

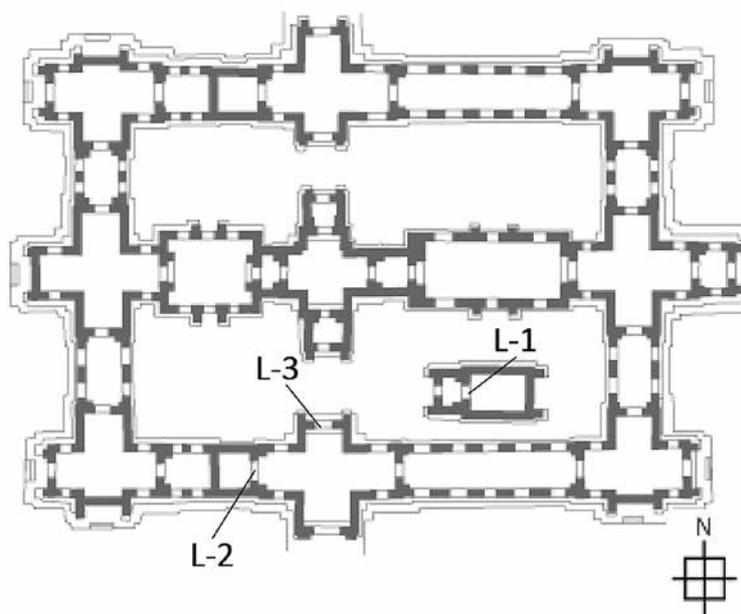
付図5 第3周壁西塔門で主題が確認された出入口装飾とその配置



リントル	
L-1	行者坐像
L-2	行者坐像

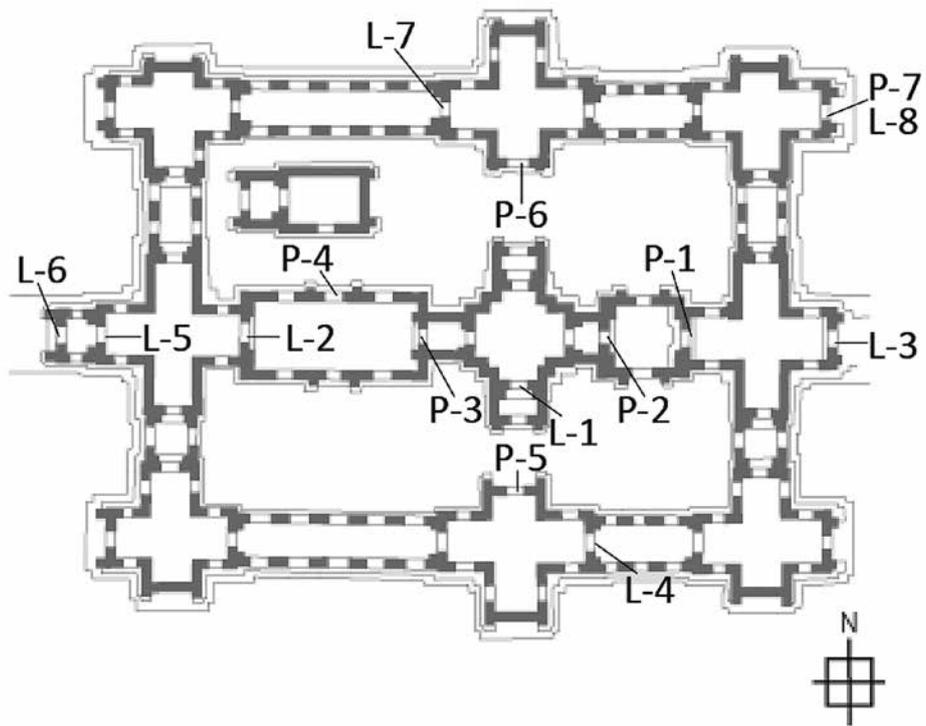
備考
1) 崩落し、この塔門北側に置かれているペディメントで、当初はこの施設に属していたと考えられる浮彫の主題：乳海攪拌、『ラーマーヤナ』インドラジットの魔法で囚われたラーマとラクシュマナ、ガルダに乗るヴィシュヌ
2) 崩落し、南側前室に置かれているリントルの主題：『ラーマーヤナ』ヴァーリンとスグリーヴァの争い、ヴァーリンを殺すラーマ

付図6 第3周壁北塔門で主題が確認された出入口装飾とその配置



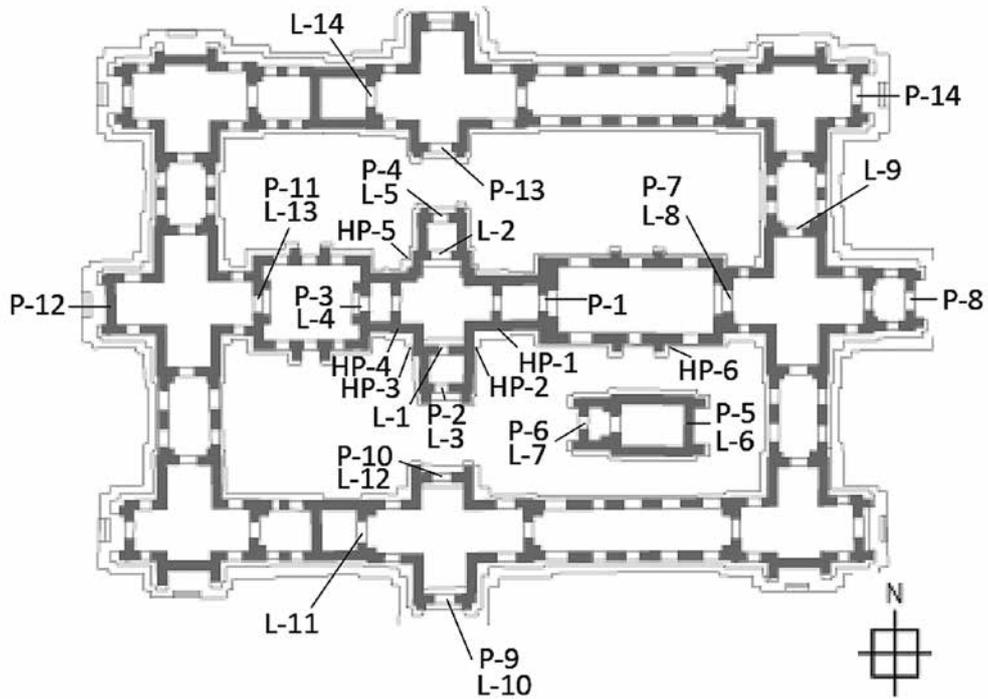
リントル	
L-1	アイラーヴァタに乗るインドラ？
L-2	「仏伝」降魔成道（崩落）
L-3	禪定印仏坐像（崩落）

付図7 第3周壁内南側副次的伽藍で主題が確認された出入口装飾とその配置



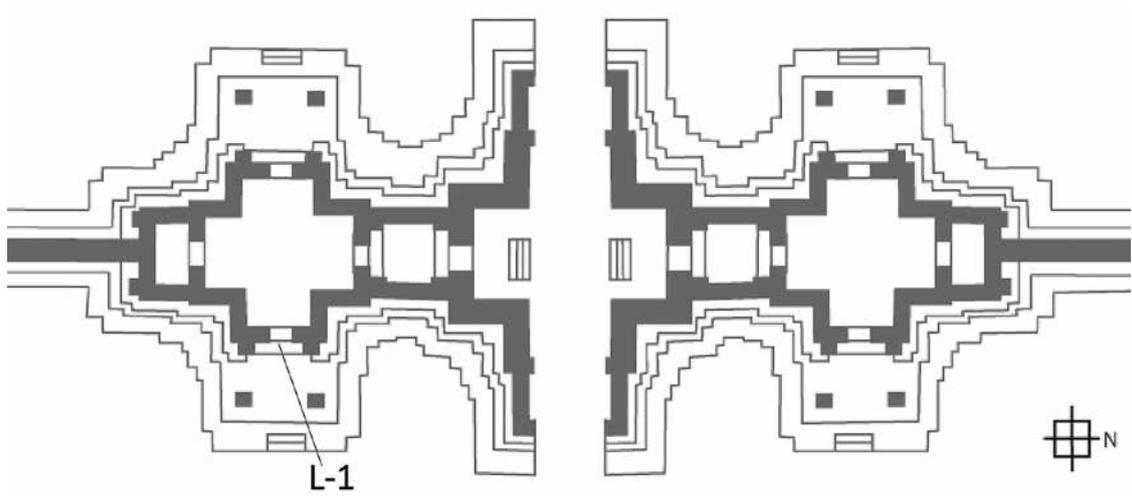
ペディメント		リントル	
P-1	ゴーヴァルダナ山を持ち上げるクリシュナ	L-1	カーリヤを殺すクリシュナ (崩落)
P-2	放浪者としてのシヴァ	L-2	行者坐像
P-3	ヴィシュヌを中心としたヒンドゥー教の三神像	L-3	ゴーヴァルダナ山を持ち上げるクリシュナ (崩落)
P-4	アスラを追うヴィシュヌ	L-4	行者坐像
P-5	ガルダに乗るヴィシュヌ	L-5	カンサを殺すクリシュナ
P-6	『ラーマーヤナ』アヨーディヤーへの凱旋	L-6	ケーシンと戦うクリシュナ
P-7	アスラを追うヴィシュヌ	L-7	行者坐像
		L-8	行者坐像

付図8 第3周壁内西側副次的伽藍で主題が確認された出入口装飾とその配置



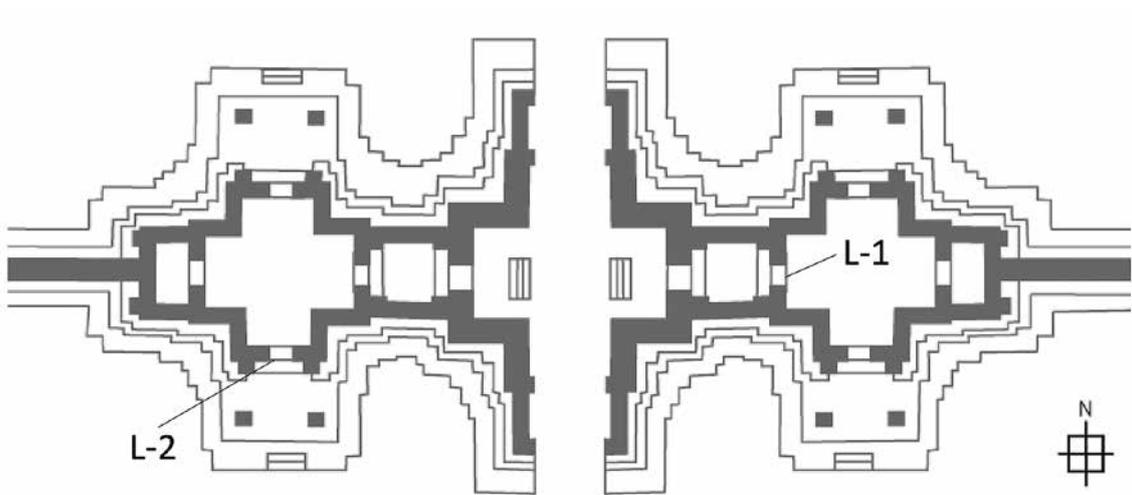
ペディメント		リンテル		ハーフペディメント	
P-1	シヴァを中心とした ヒन्दゥー教の三神像	L-1	『ラーマーヤナ』 ラーマと猿王スグリーヴァの 同盟	HP-1	行者坐像
P-2	シヴァを中心とした ヒन्दゥー教の三神像	L-2	『ラーマーヤナ』 シーターの誘拐	HP-2	行者坐像
P-3	踊るシヴァ	L-3	ナーガを抱えるガルダ	HP-3	行者坐像
P-4	『ラーマーヤナ』 シーターの神明裁判	L-4	ゴーヴァルダナ山を持ち上げ るクリシュナ	HP-4	行者坐像
P-5	アスラを追うヴィシュヌ	L-5	アスラを追うヴィシュヌ	HP-5	行者坐像
P-6	ゴーヴァルダナ山を持ち上げる クリシュナ	L-6	行者坐像	HP-6	行者坐像
P-7	アナントに横たわるヴィシュヌ	L-7	ガルダに乗るヴィシュヌ		
P-8	『ラーマーヤナ』 ラーマと猿王スグリーヴァの 同盟 (崩落)	L-8	行者坐像		
P-9	ヴィシュヌの超三界	L-9	『ラーマーヤナ』 ヴァーリンとスグリーヴァの 争い		
P-10	シヴァを中心とした ヒन्दゥー教の三神像	L-10	アイラーヴァタに乗るインド ラ (崩落)		
P-11	踊るシヴァ	L-11	行者坐像		
P-12	『ラーマーヤナ』 アヨーディヤーへの凱旋	L-12	台座に坐すヴィシュヌ		
P-13	台座に坐すヴィシュヌ	L-13	行者坐像		
P-14	『ラーマーヤナ』 ランカー島の闘い (崩落)	L-14	『ラーマーヤナ』 シーターに会うハヌマーン (崩落)		

付図9 第3周壁内北側副次的伽藍で主題が確認された出入口装飾とその配置



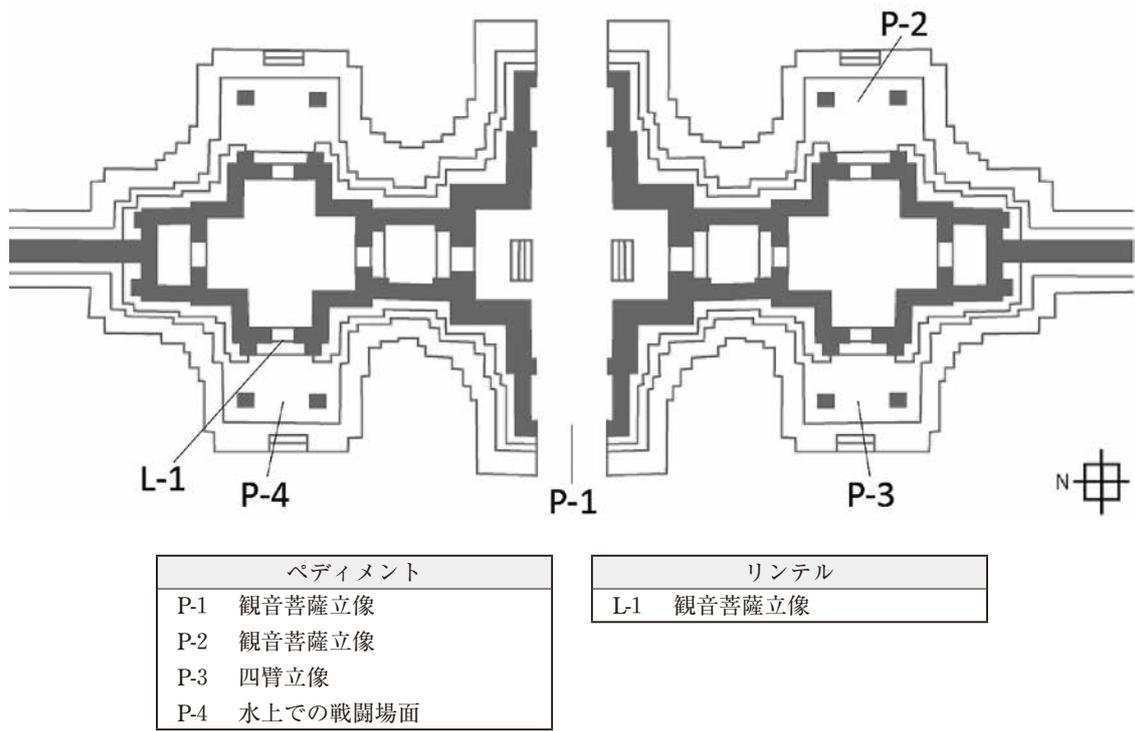
リントル
L-1 禪定印仏坐像 (崩落)

付図10 第4周壁東塔門で主題が確認された出入口装飾とその配置

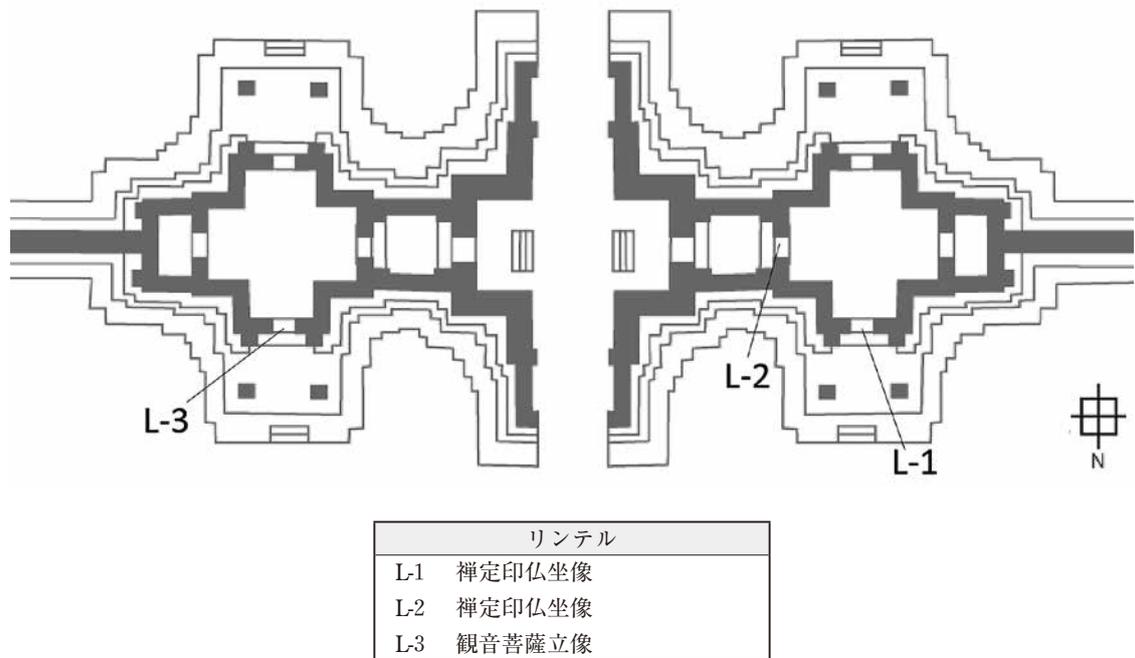


リントル
L-1 禪定印仏坐像
L-2 ナーガを抱えるガルダ

付図11 第4周壁南塔門で主題が確認された出入口装飾とその配置



付図12 第4周壁西塔門で主題が確認された出入口装飾とその配置



付図13 第4周壁北塔門で主題が確認された出入口装飾とその配置